



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	ルターの「奴隷意志論」における人間と自由意志
Author(s)	後藤博一
<i>Citation</i>	キリスト教論藻, No.8 : 55-68
Issue Date	1974
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

ルターの「奴隷意志論」における人間と自由意志

後 藤 博 一

一

宗教改革者マルチン・ルター(1483～1546)の信仰と思想は、カール・ホル(Karl Holl 1866～1926)の研究以来よく研究されるようになってきた。そして彼に対する誤解が解けるに従ってルターの神学は、プロテスタント神学の中で中心的位置を占めるようになってきたといつてよいであろう。

ルターはある特別な教理を創ってそれまで属していたカトリック教会を去り、ルーテル教会をつくつたと考えられやすいが、ルターは何も新しい教理を創つたのでもなんでもなかった。ルターは救いの確かさを求めて、魂の絶望と苦悩の中で聖書をより深く研究していった。そして聖書をより深く研究することによって福音の真理を発見したのである。新しく発見された福音は、次第にルターの神学全体を変革していった。ルターはその神学を一度も完全な体系の形ではあらわさ

なかった。

ルターの膨大な文書は、現実の具体的状況に直面して、論争、説教、勧告等の形であらわされたものである。

これからとりあげる「奴隸意志論」(De serbo arbitrio 1525)も、ルターと当時の人文主義の巨匠であり、ヨーロッパ精神界の王者であったエラスムス(Erasmus 1466~1536)との歴史的論争の中から生み出されたものである。ルター自身は、この書と「教理問答書」(Katechismus 1529)のみが彼の正当な著作であると言っていることから推察されるように、この書には彼の思想の核心が展開されている。ルターの「奴隸意志論」はエラスムスの「自由意志に関する評論」(De libero arbitrio diatribe 1524)に対する回答として書かれたものである。

エラスムスは当時のカトリック教会の腐敗に我慢がならず「対話集」、「痴愚神礼讃」等の著作で皮肉をこめて嘲弄を浴びせており、人間の言葉でおおわれている当時のキリスト教を古代の澄みきった福音の教理の源泉に帰ることに努力していた。従って宗教改革が始まったとき人々は、「エラスムスが卵を生んで、ルターがそれを孵した」⁽²⁾と思ったのである。これはエラスムスがこれまで努めていた独立的、自由な、中庸の道から逸れ、いかにも改革派のように思われていることを示している。エラスムスが「私はルターとは何の関係もない」と幾度言明しても、エラスムスがルターに反対の論文を書かない限り認められそうもなかった。事実ルターに反対の論文を書くようにとの圧力が強くなっていた。⁽³⁾エラスムスはルターの「九五ヶ条論題」が出た時、ルターの意見に異論はないと同意を示し、ヨーロッパ中の反ルターの中で極めて同情的であった。しかし周囲の情勢に制約され、傍観者として留まることが出来なくなったエラスムスは、ルターに対して「自由意志に関する評論」を刊行したのである。

ルターとエラスムスは、ミサ、告解、断食の否定、秘蹟や教皇制への疑問等において大体同意見であった。しかしエラ

スミスのとりあげた論点は、「人間の救いに自由意志は介在するや否や」という問題で、人間観の核心に触れる問題であり、キリスト教思想の重要問題である。ルター自身も「奴隸意志論」のおわりにおいて、エラスムスのとりあげた論点に対し「多くの人々のうち、あなただけが事態そのものを、即ち事態の本質をついたのであって……あなただけが事態の主要点を見たのであり、主要事を把握したのであり、私はこのことに対し心からあなたに感謝をのべる」と言っている。⁽⁵⁾ 宗教改革の主要点は、贖宥券でもなく、教皇制でもなく、実は人間観に存することを表明している。

筆者はルターの間人観を二人の論争を通して明確に把握したいと思う。ルターの間人観は神観と密接な連関をもっており、神観はルターの間人観の背骨を成しているといえる。

二

「ルターの間人観は、彼の体験の忠実な複製である」と教会史家ホルが言うように、ルターの間人観はルターの間人観と密接な関係がある。ルターの間人観として銘記すべきは、単独活動の間人、予定の間人、隠された間人である。これらは彼の信仰体験から形成されたものであると言ってよいであろう。

ルターの間人観は神中心の間人観であり、神より発した間人観である。近代人の考える間人観のように、人間を中心とし間人を人間の願望、要求の対象とするのではなく、むしろ人間を神のために存するものとみたのである。

ルターの間人観は神と人間との間に無限の距離を意識しており、神は全知全能の力強い間人として把握されている。「まず第一に神は全能である。可能性においてのみならず、現実性においてもそうである。そうでないなら神はおかしい間人であること

だろう」⁽⁷⁾ということばに單的に表現されている。ルターの單獨活動の神というのは、人間の救いに関しては全知全能の力強い神が全てにおいて全てを働く神であるということである。人間は救いに関する神の一方的活動をただ受け容れるのみである。そこに中心となるのは神の活動であつて、決して人間の活動ではない。「神は自分ひとりでお造りになったいっさいの被造物を、自分ひとりでその全能の働きによつて動かし、驅り立てたもう。この神の働きを彼ら被造物は、避けることも變えることもできない。かゝつて何者であれ、神から与えられた能力の程度に応じて神の働きに従ひ服従するのである。このように全てのものが、不敬虔な者までが神の働きに協力しているのである」⁽⁸⁾ここからルターの宗教は「受動的宗教」とも言われるのである。

エルフルトの修道院で、救いの確かさを求めて苦悩していた頃のルターは、この單獨活動の神を知らなかった。有名な「塔の体験」(Turnerlebnis)においてルターは、「神の義」(Gerechtigkeit Gottes)は自分で努力して獲得する「能動的義」(aktive Gerechtigkeit)ではなく、神から与えられているものを受け容れる「受動的義」(passive Gerechtigkeit)であるとの確信を得たのである。かくしてルターは、宗教改革の原理である「信仰のみ」(sola fide)を強調するのである。「信仰のみ」の宗教改革原理の背景には、ルターの單獨活動の神のあることを忘れてはならないであらう。

神の全能は、神の獨占活動を意味し、神の獨占活動は、予めある者を救ひある者を滅びに選ぶことができる予定の思想を有している。予定の神というのは、救いの根源は全く神のこの選びにあると考える信仰からくる神観である。予定の教理からすれば、人間の側からの努力や意志は全く無力であり、救ひは神の意志によつてのみ定められているので、人間の自由意志は全然認められないのである。ルターは「神は不変で永遠で誤つことのない意志によつていっさいを予見し、約束し、なしたものである」⁽⁹⁾と予定の神についてのべたあと、すぐ続けて「この電撃によつて、自由意志は打ち倒され、

徹底的に根絶されるであろう」⁽¹⁰⁾と述べていることからわかるように、予定の神と人間の自由意志とは、もっとも鋭く対立するのである。エラスムスによれば、救いは大部分神の恩寵によるのであるが、人間の側も神の恩寵をうけるにふさわしく善行を積み重ねなければならないと考える。⁽¹¹⁾救いは神の恩寵と人間の自由意志による功績との協働（Zusammenwirken）であると考える。この功績思想を受容れることは、ルターにとっては予定の神を否定することであり、神の全能を否定することになるので、真向うから反対するところとなる。救いは全く神のわざであり、神の手中に存するからである。「神の人間に対する愛や憎しみは、世界が創られる前から、永遠にして不変である。単に功績や自由意志のわざのまえからのみでなく、全てのことは、神が永遠の昔から、愛したり愛さなかったりするに従って、わたしたちのうちに必然的に生じる」⁽¹²⁾のである。

ルターのこのことばには、救いのみでなく憎しみも予定されているとするルターの思想が表われている。創世記のヤコブとエサウの物語において、神がヤコブを愛しエサウを憎まれたのは、ヤコブの功績によるのではなく、エサウの先行によるのでもなく、彼等が生れる前から神が予め定められていたこと⁽¹³⁾であり、出エジプト記のパロの心のかたくな、神に対する反抗も、神が前もって定めおかれた事柄で、「私はパロの心をかたくなにする」⁽¹⁴⁾といわれた神の意志に起因しているとルターは予定論の基礎づけを旧約聖書に求めた。エラスムスは、この予定論を除去するのに、説明の厄介さを感じた。ではなぜ神がエサウを憎まれたのか、なぜパロが神に逆うべく定められたのか。エラスムスは教父たちの説明に従って何とか説明しようとしているが、成功しているとは言えない。⁽¹⁵⁾ルターによれば、もし神の処罰がその人の失行によるのであれば、救われる者においてもその人の功績によるのであり、そこでは神の恩寵は無意味となり、キリストの十字架も虚しくなる。神の予定の説明づけはルターにも出来ない。「神のうちには極めがたい、認識しがたい意志があるということ

知るだけで十分である。しかしその意志が、何を、何ゆえ、いかなる範囲で欲するかを探究し、さがし出し、気にかけて、あるいはこれに触れることは全く許されないで、ただ恐れ、崇めることが許されている」と極めがたい神の意志をただ崇めることを説いている。

ルターの神観の中で最も特徴ある神観は、隠された神である。ここで「隠された」というのは、「自然」や「理性」に對して隠されているということであり、「感覚しうるもの、所有しうるもの、理解しうるもの」という人間性に隠されているということである。「神は愛である」とあるように神の本質は愛である。しかし若きルターに迫ってくるのは、審判する神、罪を罰する怒りの神であった。ルターは「神の義」発見とともに、この神の怒りの相は神の異なるわざであつて、神の本質は愛であり、怒りの相の下に隠されていることを発見したのである。「奴隸意志論」にも「神は彼の永遠の好意と慈悲を、永遠の怒りの下に隠し、彼の義を不義の下に隠しておられる」とあるように、ルターは外見上否定的に見える神は、その聖意において非常に肯定的であることを知ったのである。このことは人間理性の理解を越えている。ここに信仰の余地が生じてくる。信仰のみよく、見たり感じたり経験したりするものと反対のものの下に隠されている神の聖意を洞察し得るのである。この逆説的な信仰から出てくる神観が、ルターの隠された神である。

三

人がキリスト者となるには、罪意識、即ち罪人としての自己認識が必要である。この結果、自己に絶望した者、謙遜な者とされ、「罪の赦し」という神の和解的恩寵が与えられる。⁽¹⁸⁾光が光り輝くのは暗闇においてであるように、神の和解的

恩寵は、人間が最も低くせられた時にこそ豊かに与えられる。

ルターはドイツ神秘主義から「謙遜」(Demut)を学んだのであるが、ルターの「謙遜」とドイツ神秘主義の「謙遜」とは大きな相違がある。神秘主義の「謙遜」は、我々が無となること、言い換えれば「離脱」(Entwerden)を意味しているが、ルターの「謙遜」は、神の前における自己の悪、汚れ、無力を認識し、自己を謙遜し、徹底的に自己を否定するに至る。人間の「悪への傾向」が改められるのは、決して自由な意志による人間的努力によるのではなく、自己を否定する謙遜な者に与えられる賜物によるのである。

全てを委ね、従う態度は、信仰の態度である。カール・ホルは「悔い改めと信仰には同一過程の二面と見える。信仰は悔い改めの後に続くのではない。信仰はすでに悔い改めの中に働いている」と言っている⁽⁹⁾。ここで悔い改めということは、謙遜と置き換えることができる。信仰の人とは謙遜の人であり、信仰と謙遜とは一致している。ルターによれば、信仰は神に全ての力と自由意志を帰し、同時に徹底的な自己否定である。自己を肯定し、自己を信頼することは、自己義認であり、高慢の意志としてルターは徹底的に排斥している。ルターはこのような危険を含んでいるものを否定するのである。宗教改革の発端となった免罪符に対するルターの態度然り、エラスムスが善行をなしうる自由意志を説けば、ルターの善行をなしえない人間の奴隸意志の主張然りである。

信仰とは、与える者と与えられる者との間の授受関係であり、その内容となるのは神の義(Gerechtigkeit, die vor Gott gilt)である。「奴隸意志論」においてルターはパウロに倣い、義を二種に分けて考えている。即ちわがの義(Gerechtigkeit der Werke)と信仰の義(Gerechtigkeit des Glaubens)である。わがの義は、道徳的な市民的な義で、人々の前に認められ、称讃、榮譽を得られるであろうが、その榮譽は、自己を義とする転倒せるもので、ルターの言葉でい

ば、神の栄光を欠いていると言われよう。わざを行う者は、いかなる熱心いかなる努力も神の前には認められず、一切のわざが不敬虔で邪惡だと判断される。信仰の義は何らかのわざによって成立するのではなく、神の恩恵によって「価なしに」与えられることによって成立する。人間の熱心や努力を顧み、その結果として与えられるものは、当然の報酬として受けとられ、自己の功績を誇る高慢心を生み出す。当然の報酬として受けとられるものはや恩恵ではないであろう。ルターが自由意志を主張するエラスムスに対決したのは、自由意志を認めることは、人間の熱心、努力によるわざを認めることであり、応報的功績思想を認めることになると思抜いていたからである。「ただ恩恵のみ」と「価なしの義認」とを主張するパウロとルターには、福音の真理のために、この応報的功績思想を容認し得なかったのである。「価なしの義認は、わざの正しき者を設定するのを我慢しえない。なぜなら、無償で与えられることと、何かのわざをもって準備するということは明らかに矛盾しているからである」というルター(20)の言葉からも明らかのように、価なしの義認とわざによる義認とは鋭く対立している。価なしの義認である故にそれは恵みなのである。

四

神との人格的交わりを拒否して、内なる我欲のままに生きようとする根本的傾向に制約されている人間には、はたして自己の自由な意志によって、この根本的傾向から脱出できるか否かという問題は、歴史的に論争の続いてきた問題である。

人間の意志力で律法(Gesetz)の遵守を説くユダヤ教徒に対して、使徒パウロは、自由意志によって律法の行いを成就

できないと意志不自由論を主張したのである。人間があらゆる罪をさけるためには、人間の自由意志による功績だけで十分であると主張するペラギウス (Pelagius, 360~429) に対して、アウグスチヌス (Augustinus, 354~430) は神の恩寵と力を強調し、人間の意志の不自由を主張し、さらにルターの時代になると、エラスムスは、罪からの離脱は大部分神の恩寵に負うのであるが、人間の自由意志による善きわざとの協働によると主張するのに対し、ルターは、僅かの自由意志をも認めず、救いに関して全ての決定権は神の意志によると、人間の奴隷意志論を展開したのである。

ルターとエラスムスの間で論じられた自由意志の対象は、「救い」または「滅び」に関する事柄に限定されており、人間の日常生活上の事柄に対しては、ルターも自由意志による決定を認めている。ルターの主張「人間の意志は荷役動物 (Lasttier) のように、両者 (神とサタン) の間に置かれている。もし神がその上に坐し給うなら、荷役動物は神が欲するところへ欲し向うのである。……もしサタンがその上に坐すなら、荷役動物はサタンが欲する方へ欲し向うのである。二人の馭者の一人を選ぶ自由な選択は彼にはなく、むしろ馭者自身がこれをしっかりとらえ占有しようと争っているのである」⁽²¹⁾ というルター自身の言葉は、自由意志に関する彼の思想の結論ともいえる。

エラスムスは自由意志を「人間が永遠の救いへと導くような事柄へ自分自身を向けたり、あるいはそれから身を転ずる人間の意志の力」⁽²²⁾ と把え、人間の救いは大部分神の恩恵に負うものであるとは言え、人間の自由な意志による努力も一件であると主張する。エラスムスはルターとの論争の焦点は聖書解釈にあると判断し、オリゲネス、ヒエロニムス等教父の解釈を味方に、聖書の各個所を援用して、人間の意志が自由であることは、聖書が教え、教会の博士が肯定し、哲学者が証明し、人間理性が保証すると議論を展開した。

エラスムスの主張の中心は、人間に自由意志の力を認めないなら、そこには人間の責任も所在しないという点である。

エラスムスによれば、道徳は自由の意識に依存している。自由と責任は表裏一体を成しており、責任のない自由はないし、自由のないところ責任もないという考えは一般に認められている。エラスムスはこの点について、人間の善惡両方に変わりうる自由な意志決定が認められず、予定の必然性に従って決定されているならば、人間には何の責任もなく、罰せられるべき罪も認められない筈であると主張する。エラスムスに言わしむれば、むしろ人間に惡への必然性を課した神にこそ責任があるということになる。従って、人間に自由意志による努力を認めるべきであって、その努力を神が嘉し給う時救いが与えられ、自由意志により惡の傾向へと走る時滅びが与えられるというのがエラスムスの考えである。

エラスムスは、予定論の基礎となっている「神はパロの心を頑にされた」(出エジプト九・一二)に対して、神はパロの心を頑にされたのではなく、パロの心を予知して、パロの心がいかに頑であるかをくりかえしあらわされたのである、その結果罰が与えられたのであると解釈しようとしている。また「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」(ローマ九・一二)に対して、エサウが憎まれたのは、エサウがまだ生まれる前に、確かに憎まれるに値する「行ないをなすであらうことを神が予知しておられたからであると、自由意志による失行を主張しようとしている」⁽²³⁾。

エラスムスの自由意志擁護論に対してルターの反論は、神の全能と人間の性惡を根拠としている。パロの心の頑は神のわざであり、神の手中にあることだと答える。「兄は弟に仕えるであらう」(創世記二五・二三)と予言されたヤコブとエサウの物語において、聖書には二人の功績(または失行)についての記事は全くなく、ヤコブが愛され、エサウが憎まれたのは、ヤコブの功績、エサウの失行によるのではなく、全知全能の神の意志により、二人が生れる前に決定されているのだと答える。エラスムスはこの二個所の説明に苦勞し、神の予知を認めざるを得なかった。しかし確実な予知ができるのは、決定的に定められたものについてだけである。従って神は神御自身が予め定められたことのみを予知することがで

きる筈である。

エラスムスは、人間理性を信頼し、その視点から考えようとしている。従って理性的理解を超えたもの、理性に隠されたものへの理解に難があるように思われる。ルターは人間の理性を信頼しない。ルターの説く予定思想は、神の全能と人間の無力を示すもので、救いは人間の意志や努力に関係なく、神の恩寵にのみ関係があることを徹底して教える。ヤコブが救われたのも神の恩寵であり、エサウやパロが救われなかったのも神が恩寵を与えなかったためである。選ばれた者が偶然に救われたのではなく、必然に救われたのである。もしも救いが功績によって与えられるなら、救いは人間的なものであり、偶然であると言われるが、神の選びと神の不変の堅い意志の予定によって救われるなら、人間的偶然性の余地なく、全く神的必然的に救われたと言うべきである。ここに救いの確かさがあるであろう。人間理性の限界を認め、隠された神という神観をもっているルターは、次のように言っている。「私たちがなすいっさいは、また生成するいっさいは、たとえ私たちに可變的偶然的に生じるように見えても、神の意志を注視するなら、逆に必然的不變的に生じている」⁽²⁶⁾ある者を救いに選び、ある者を滅びに選ぶ予定の神に対しては、人間の側からの努力や意志は全く無力となる。神の予定という必然性と、自由意志による功績という偶然性は両立できない。神の意志を絶対とする神中心的信仰から、ルターは人間の救いに関わる自由意志を否定せざるをえなかった。

神の全能を全面的に認める信仰から導き出された予定思想に拠って、自由意志を否定してきたルターが、自由意志を否定するもう一つの要因として、彼の悲觀的人間觀を見落すことができない。彼によれば、人間の本性は自己中心、自己追求的に生きようとする根本的傾向のもとにある。⁽²⁷⁾「人間の邪惡さの本質はそれ自身が惡であるために、惡以外は何もなさず、またなしえない」⁽²⁸⁾のである。

エラスムスは楽天的人間観に立って、人間の理性を信頼し、人間の肉は盲目で善悪を識別できなくとも理性は明瞭に識別し、道徳的善を求めて努力することができるとい⁽²⁹⁾う。ルターはこれに対して、人間の主要部分である理性といえども、神的事柄に対しては盲目であり、自己の罪についても何ら知るところがないという。「人間理性は神のあらゆる言葉やわざを取り扱うことには盲目で、つんぼで、愚かで、不敬虔で、瀆神的である⁽³⁰⁾」と主張する。このような人間には、決して救いに関わる善行を生み出すことはできないと主張する。

ルターの自由意志についての考えは、以上のように、彼の神観と人間観から導き出された奴隷意志である。ルターのこ
とばで言えば、荷役動物の意志であり、馭者の自由意志に全てが委ねられているのである。

註

次の略号を用いる。

Mü. Erg. — Münchner Ausgabe Ergänzungreihe 3. Auflage.

＝ Martin Luther Ausgewählte Werke, hrsg. von H. H. Borchardt u. Georg Meitz. (München 1954～)

- (1) ルター著作集第一集七卷(聖文舎刊)六頁。
- (2) R. H. Bainton Erasmus of Christendom. (日本語訳「エラスムス」日本基督教団出版局、一九四頁)
- (3) J. Huizinga, Europäischer Humanismus: Erasmus, S. 143. 「エラスムス」二一八頁。
- (4) 「エラスムス」一八九頁。
- (5) Mü. Erg. I. S. 248. (De servo arbitrio, 1525)
- (6) K. Holl, Gesammelte Aufsätze I. S. 38.

- (7) Mg Erg. I. S. 154.
- (8) ebd. S. 199.
- (6) ebd. S. 24.
- (9) ebd. S. 24.
- (11) Erasmus von Rotterdam, Vom freien Willen. (Verdeutsch von Otto Schumacher) S. 79.
- (12) Mg Erg. I. S. 161.
- (13) 顯世記二五章ノローマ九章一―一二。
- (14) 出エサヘレ顯子章三。
- (15) Erasmus von Rotterdam, Vom freien Willen, S. 47~53.
- (16) Mg Erg. I. S. 109.
- (17) ebd. S. 44.
- (18) ebd. S. 43.
- (19) K. Holl, Gesammelte Aufsätze I. S. 133.
- (20) Mg Erg. I. S. 225.
- (21) ebd. S. 46, 47.
- (22) Erasmus von Rotterdam, Vom freien Willen, S. 24.
- (23) ebd. S. 53.
- (24) Mg Erg. I. S. 143.
- (25) ebd. S. 159.
- (26) ebd. S. 24.

- 27) ebd. S. 141.
 28) ebd. S. 176.
 29) Erasmus von Rotterdam, Vom freien Willen, S. 61.
 30) Mit Erg. I. S. 138.

松蔭女子学院大学・松蔭女子学院短期大学 學術研究会刊行物一覽
 機関誌（昭和四十九年度刊）

研究紀要 第十六号 人文科学・自然科学篇
 文 林 第九号 国 文 学 篇
 キリスト教論藻 第八号 キリスト教 学 篇
 Shoin Literary Review No. 8 英語・英文 学 篇
 生活科学論叢 第七号 被服学・家政学 篇

學術研究叢書

哲学概論 八代祥吉著 昭和四十年六月刊 絶版
 憲法概説 太田一雄著 昭和四十年十月刊 絶版
 インドの第四次五か年計画 インド政府計画委員会編・
 黒沢一晃訳 昭和四十九年三月刊
 日本国憲法 太田一雄著 昭和五十年三月刊 予定
 （『憲法概説』改題・改訂本）
 近代文学論攷—比較文学的研究—（仮題）
 木村 毅著 昭和五十年六月刊 予定

テクニスト

Technical Procedure of International Trade.

太田一雄著 昭和四十五年十二月刊
 新大学英作文 加藤豊男著 昭和五十年三月刊 予定
 右記刊行物についての御連絡は本學術研究会宛に願ひ
 します。